紅姫

紅姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅姫

【Ｎコード】
Ｎ３２４１Ｉ

【作者名】
紅姫

【あらすじ】
ごく普通の中一紗代が体験した本当の恋。
それは、ある男の子がくれたモノでした。

紅姫（前書き）

どうも。紅姫です。これはリアバナ、を、もとにした話。
私になったつもりでどうぞ読んでみてくださると幸いです。

紅姫

ピピピピピピピピピピピピピッ！
と、携帯目覚ましが鳴った。
「ふぁ～～～」
起床。私の朝の始まり。今日も一日がはじまる。
初音　紗代。中学一年生。性格でいうと、「ド天然」・・・・と、家族には言われる。
目をこすりながら、私はリビングのある一階へと降りる。昨日の体育の筋肉痛がとれていない。
「おはよォー」
挨拶。
「紗代チャンおはようー。もう少しで起こそうと思ったのよ。」
これはうちのママ。メガネが似合いすぎる具合の顔立ちだ。
私は急いで朝の食パンを食べると、ママが作ってくれたコーヒーを飲み終えた。
すばやく制服に着替えると、私は家を出た。
シャーシャーシャー。
優しいブルーの自転車が、ゆっくりタイヤを動かし音を立てる。
いつもの公園を左にカーブ。その先には、一人の少女がキョロキョロしていた。
「果歩ー。おはよー」
すると可愛いマッシュルームヘァーの手先がかすかに動く。
「オッいたいた。おはよう。」
彼女の名前は、杉菜　果歩。私の小学校からの親友で、いつもこうして朝待ち合わせをしている。
「んじゃ、ィこッ」
二人は自転車をこぎだす。すると、３人の男たちが、列に並んでこっちへ来るのが分かる。

（来た・・・ッ）
ふいに呟いた。そこへは、一番後ろに座っている谷口　幸助。これが気の小さい男の子だ。
そして2番目にいくのは、茶髪のはねた横髪を揺らしながら可愛い顔でいるのが、奥田　雄大。こいつはチビで馬鹿で頭の悪い奴だw だがみんなにはそれほど嫌われていない。問題は、その二人を率いって先頭をいく男だった。あいつは荒木　颯馬。こいつが、いがいに一番厄介者。一見クールな性格にみえるが、自分の認めた奴にしか本音をださない無駄なプライドを持った奴。私はこいつと小学3年生からの友達だ。これぞ腐れ縁とでもいうのだろうか。まァそんな関係の・・・はずだったのに。
「チューッす！荒木ら」
声をかけてみる。
「・・・・おは」
照れて顔を赤く染めた奴の顔。風にふんわり揺れる髪。似合いすぎる黒色の学ランは、いい具合にしわをつけている。私はその姿をただじーーーーっと見つめているだけだった。
「紗代？行くよ？」
果歩に顔をのぞかれ、すっかり私は赤くなってしまった。そして、不意に正気に戻る。
「アッ・・・ごめんごめん」
何！？
これが私の行動に不審を感じた心の声だった。
ガラッ
教室のドアを全開。
「おー。おはようえぐっつァん」
私の名前はえぐっつァんだ。名付け親は、荒木。何故だかわからないがつけられた。
この名前がひろがっていき、今の私がいる。まァ「没」・・・・というのも納得はできないセンス。

略して、微妙。だ。
バックの中から教科書を机の中にぎゅうぎゅう押し込む。入らない。
だんだんイライラしてきた。グシャッと、音がした。
「あれ？なんか変なおとした。・・・、ま、いっか。入ったし」
この紙が私にそんな意味をもたらすとは知らずに。

紅姫

「あァ～・・・あっつ・・・・」
ォニュウの下敷きで汗を仰ぎながら、私はボソッと呟いた。
言うなり、すぐ横に荒木がちょこんと移動してきた。
「俺にも。」
「は？？」
『俺にも』という言葉だけで私はドキドキしてしまっていた。
「・・・・・・」
沈黙のまま、私は下敷きで自分の顔を仰ぎながら、たまに荒木の顔も仰いであげた。
「あァァ～・・・・気持ちぇー」
目が細い荒木は、とても可愛い目で涼んでいた。
私はそれがどうしようもなく可愛かった、のか、思わず口に出してしまった。
「・・・・かわい」
「おめぇよりはな」
と、にやッとしながら奴は笑った。
「何それwうざー（笑）」
「本当の事を言ったまでだ。んじゃバイなら」
と、いうなり、あいつはさっさと男子の塊の連中の輪に入って行った。
（良い顔して笑うんだなァ・・・・）
なんて思いながら、ボーッと荒木を見つめていた。
すると。
「なァーえぐっつァんー。何こっちじろじろ見てんだ？？」
輪の中心にいた「だいちゃん」が顔を傾げた。
山崎大輔。
私の保育園からの幼なじみで、よく一緒に遊んだ覚えがあった。

そして、小学校で別れ、こうしてまた戻ってきたってわけ。
そしてこのだいちゃんは私のモと彼。
中学入りたての頃、向こうから告白された。
そしてまだデートもしてくれずのあいつに私は別れを告げたという、
とってもつまらない恋愛をした。
今はもう好きでない・・・というと、好きになれない。
だって今この恋愛と向き合っていきたいから。
だいちゃんとすごしたみたいな恋愛はもうしない。
と、私は別れを告げたとき真っ先に決めたんだ。
でもそうなったからって、友達というごく普通の関係で、過ごしていた。
「アッ・・・え？別に・・・」
と、私は口ごもってしまった。
「荒木を見つめてたんだよ」
なーんて言えるわけがないだろうw
「ププ。おめぇ颯馬のこと見つめてたろ」
バレタ、ヤバィ。
「は！？んなわけないっしょ！？そういうだいちゃんは、今日テストあること知ってんの？ベンキョしてないでしょ～！？」
と、私はばればれの動揺ぶりで、でもこれが精一杯で、だいちゃんの嫌いな教科の英語の話題にすり替えた。
「ァッ！！！！！！！！やっべw俺０点取ったらまぢかーちゃんに暴力くらうw」
美味くハマってくれたおバカなだいちゃんに、感謝。
危なかった。
私は思わずため息をつくと、無言で廊下に足を運び、窓の外をぼーっと眺めることにした。
野球の部活の男子達が、勢いよくバットの素振りをしている横で、
テニス部がランニングをしている。
荒木は、部活的に運動系は好きじゃないみたいだ。

無論。
私も運動神経０。といっても、荒木はそこそこ運動神経はいい方なのだ。
それが、私の苦しい時間が増えたひとつなのかもしれない。
運動が嫌いだから文化部の私と、運動できるのに運動嫌いな文化部が、私と荒木を科学部に導いた。
意外に実験はあまりしないみたいなので、私は一安心した。
いつもはＰＣ。みんなもくもくとキーボードを打ちまくる。
そして、だいちゃんも果歩も偶然的に科学部。なんだこの不安定なメンバーは。
同じ部活になることで、たいていの人はラッキーなんて思ったりするだろう。
だが、私は違った。
『苦しい時間』が増えるだけ、と、思う。今でも、思う。どうせ変わらない運命なのだから、どうせかなわない運命なのだからと、今の私は背を向けている。そうしたら、いつまでもあいつを見つめてしまうから。目の釘になってしまうから。見つめるだけでよかった、なんて思った私がいけなかったんだ。
と、ふいに、荒木が私の隣に立った。
心臓がまひりそう。なんでくんの。
みたいなことを口々に心の中で思いながら私は冗談でいった。
「・・・・何。うち一人だからチャンス見計らって告白しようってわけ」
と、にやにやと呟いた。
「は！？ちげーーーーーよw」
頭をがくっと下に落とし顔を染めて笑っていた。
「図星ですか。いいよ。きいたげるw」
私はアホ顔しながら耳をつまんで伸ばした。
「誤解だ」
つぼにはまって笑いながら言われた。

「今日部活来る？って聞きに来ただけじゃッ」
と、変な声をする荒木。
「あ、そんなに来てほしいなら来てあげてもいいけど」
「お前誤解最強」
「そりゃどうも＾＾」
と、いうと、笑いながらあいつは去って行った。
私はどちらかというと、こんなキャラ。
もじもじなんてしてられない。ッて感じかもしれない。

紅姫（後書き）

なんか中途半端に終わってしましましたね。続きは明日書こうかな

王子×姫

カツ、カツ、カツ。
私は、スリッパの音を鳴らしながら、今廊下を歩いている。部活へ行くのだ。
と、コンピューター室の前でうろうろしていたのが『王子』がいた。
「あんたくんのはぇぇw」
「へっへっへ」
照れくさそうに笑う。うちのどこかがぐさっとくる。なんだろう、この感じは。
すると、私の手が無造作にあいつの頬を触る。
自分でモビックリしていた。何やってんだうちは。
「・・・・んだよ」
「しっとりしてるねぇw」
「うるおいたっぷりの俺に何を言う。」
その得意げな言葉に、思わず私は吹き出してしまっていた。
やっぱり触れたい。もっと、触れたい。
こんな思いがわきあげてきたのは、今この一瞬だった。

王子×姫（後書き）

だりィ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3241i/

紅姫

2010年10月20日17時16分発行